

超人秘密結社元構成員『緑谷出久
(21)』の活動記録

MIL0201

ヘルサレムズ・ロット帰りの出久くん

目次

第 1 話	Hel l o w o r l d
第 2 話	誤算
第 3 話	『腕』

第1話 Hello, world

宵闇に——怨嗟えんさの叫びが木霊こだまする。

ここは魔界都市ヘルサレムズ・ロット。かつてニューヨークと呼ばれた大都市。そして異界と人界が交差し、超常犯罪が飛び交う『地球上で最も剣呑な緊張地帯』だ。

街には数多の異形生物が闊歩し、魔法に肉体改造、靈的現象などは当たり前。『異常』事態、『怪奇』現象なんて言葉は死語になって久しい。

まさに『異常が日常』となったこの街ではあるが、しかして今宵の『日常』は些か以上に飛び抜けていた。

かの災厄が現れてから僅か十数分、無数の建造物が塵と消え、数多の命が路傍の染みと化した。

事の下手人は《血界の眷属》ブラッド・ブリード。

太古の異界存在が、人間のDNAに術式を書き込み、改造する事で造り上げられたとされる怪物であり、人界においては『吸血鬼』として伝承される人外の徒だ。その腕の一薙ぎはビルをジェンガの如く崩落させ、悠久の時の中で培われた叡智は人類の遙か先を往く。さらには焼き尽くされ灰にされようが即座に再生してしまうほどの絶対的な不死性を宿している。

そして人類にとって災厄なことに、個の戦力で軍を凌駕する究極生物であるところの彼らの食物は——人間の血液だ。

つまりは食物連鎖のピラミッドにおいて人類を見下ろす捕食者。人間が動物にそうしてきたように、人の命を摘み取り糧とする上位存在である。

しかし、その絶対的の上位存在が今——断末魔を上げていた。

「ザリド・ファズルルス・ギル・バ・アギラメニカ。貴公を密封する——！」

決死の殺気を撒き散らす上位存在に臆する事無く、静かに、されど猛々しく拳を引き絞るのは獣の如き巨軀の紳士。

彼こそは血界の眷属に対抗するべく結成された《牙狩り》きばがの一組織、《超人秘密

結社ライブラの統括責任者、クラウス・〈フオン〉・ラインヘルツである。

彼は文字通り血で血を洗う決死の時間稼ぎの末に、遂に仲間が暴いた吸血鬼の真名——諱名を握ることで、あらゆる機器、センサーを透過する血界の眷属、その不定形な実体を、自らの奥義に捕捉した。

「憎み給え、赦し給え、諦め給え、人界を護る為に行う我が蛮行を——」
手向けとして捧げられた言葉は、これから永劫の拘束を受ける上位存在への敬意、そしてせめてもの慈悲。それらを握り、クラウスは拳を固める。

呼応して、左手に装着した十字架を象ったナックルガード、その内側にある鋭利なエッジがクラウスの皮膚を食い破り、《滅獄》の属性を宿した血液を内部に装填した。

グ　ン　レ　ブ

式 9 9 9 術 闘 血 流 ド ー リ

その拳こそ血界の眷属の不死性を打倒し得る人類唯一の牙。

不死者の完全な無力化という、クラウド・V・ラインヘルツが仲間の力を借りてのみ為せる血法の絶技。

「久遠棺封縛獄!!」
エーザイヒカイトゲフエンゲニス

剛拳が不死者の胸を穿ち、ナツクルガードから《滅獄》の血液が撃ち込まれた。不死者の天敵たる牙狩りの血液は、ブラッド・ブリード血界の眷属の体内を駆け巡り、皮膚を裂き、肉を溶かし、破壊の限りを尽くす。

やがて血液は爆裂するように血界の眷属の身体から噴出し、不死の肉体が再生するよりも疾く、逃れ得ぬ血の牢獄を形成する。

「ぐううッ！牙狩りッ……風情がああああああああ！」

街を壊し、人を殺し、人外の力を以って暴威を振るった血界の眷属が今、叫喚とともに折りたたまれていく。

血界の眷属は転移術式で逃走を図るも、最早何もかもが手遅れだ。

苦しみがく上位存在の最期に、クラウドは、胸に拳を当て、悼むように瞑目する。

「どうか安らかに——」

やがて断末魔が止むと、地面に一つ、不死者の末路である醜悪な意匠の十字架が転がった。

ここに不死者の《密封》は成された。

異界と対する人類の最前線、ヘルサレムズ・ロッド「にて、今日もすんでのところで人界の平

和は保たれたのであった。

「クラウスさん！大丈夫ですか！」

終戦の静寂の中、クラウスに駆け寄ったのは一人の青年だ。

名を、レオナルド・ウオッチ。

万物を見通すと云われる《かみがみのぎがん神々の義眼》をその身に宿す、ライブラの構成員だ。

此度こたびの戦いで血界の眷属の諱名いみなを暴いたのは彼の義眼の力に依よるものであり、血

界の眷属の密封に諱名の特定が不可欠であることから、勝利に最も貢献した人物の一人と言えるだろう。

そんなレオナルドの問いかけに、クラウスは獯猛に尖った犬歯を光らせながら、紳士的な笑みとともに答えた。

「少々血を流しすぎたが……私の方は問題無い。それよりも『彼』だ。私が来るまで持ちこたえた『彼』の奮闘が無ければ、被害はこの程度では済まなかっただろう。レオナルド、頼めるか」

無言の首肯の後、レオは《神々の義眼》を起動する。

遠視、透視、眼球の乗っ取りから、幻術の打破までなんでもござれの神造物にか
ければ、件の『彼』^{くだん}を見つける事は容易い事だ。

「あの瓦礫の下です！」

レオが指差したのは、無数の瓦礫の山のうちのひとつ。

クラウスは満身創痍の身体をおして駆け寄ると、並々ならぬ怪力で瓦礫を捲^{まく}りあげていく。

程なくして、一人の『青年』が掘り起こされた。息を乱しながら地面に背を預けた『彼』。

やや緑がかかった黒い短髪、成人してなお、僅かな幼さを残した顔は疲労と苦痛に歪んでいたが、クラウスの顔を見ると安心したのか、柔和な笑みを浮かべた。

クラウスは『彼』に手を差し伸べ、抱き起こす。

「生きている様で何よりだ。そしてよくやった。『デク』くん」

*

『デク』と呼ばれた青年——^{みどりやいずく}緑谷出久はこの世界の人間ではない。

青年がこの世界に迷い込んだのは、まだ青年が少年だった頃、もう七年も前のことだ。

そう、全ての始まりは出久がヘドロの《個性》を持つヴィランに襲われ、憧れのNO1ヒーロー、オールマイトに助け出されたあの日――。

*

出久の生まれた世界は、総人口の八割が《個性》と呼ばれる先天的な超常能力を持つ超人社会である。

《個性》とは文字通り人によって千差万別、手汗がたくさん出るなどという宴会芸の様な《個性》から、森一つ焼き尽くせる炎を出す戦術兵器に匹敵する強力な《個性》、更にはファンタジーのドラゴンの様に翼が生える異形の《個性》までと枚挙に暇が無い。

話だけ聞けばまるでテーマパークのように刺激的な世界になったのだと感ずるかもしれない。

しかし『人間を規格化出来なくなった』ことは、世界に未曾有の混乱をもたらした。

《個性》の暴走による傷害事件が多発、手口不明の窃盗事件の乱発。

《個性》を神の贈り物だという宗教、《個性》保持者を集めて徒党を組む反社会勢力の乱立。

《個性》に関連した犯罪件数は爆発的に増加し、警察等の治安維持機関は対応に追われた。しかし《個性》はあくまで身体機能。拳銃などと違い探知機にかかる訳も無い。少々大げさに言えば、人類の八割が不可視の凶器を持った社会となったわけだ。

鎮圧の為の武装も、犯罪に対する法も既存の物は『平均的な人間』を想定しての物だ。

当然の結果として、警察は後手に回り続け世界各地が無法地帯への一途を辿った。そんな中、脚光を浴びたのが《ヒーロー》という職業だった。

始まりは単純。個性を使い悪行を為すものもいれば、個性を使い善行を為す者も居たのだ。

個性を以って個性を取り締まる。そんな有志の自警団から始まったヒーローは、対個性への各種整備が終わるまで多大な貢献をしたとして、その功績と有用性を認

められ、今では国家資格職となった。

超常能力を駆使して悪を討つ。まるでコミックの中から飛び出したような職業だ。更には人気を得ればCM、TVにグッズ展開、富に名声が思いのままとくれば、小中高生が将来なりたい職業ランキングで数十年不動の一位を獲得するのも当然のことと言えるだろう。

そして『彼』、緑谷出久も、例に漏れずヒーローに憧れる少年の一人だった。

物心ついて間もないころ、TVのニュース映像で目撃したNO1ヒーロー《オールマイト》に憧憬を抱き、個性を使って多くの人々を救う自分を幾度も夢想した。しかし——出久に個性は発現しなかった。

ヒーローに憧れる少年は《無個性》と称される二割の側^{がわ}だったのだ。

*

社会で少数派^{マイノリティ}に属するというのは、それだけで苦難を強いられる。

学校には当然のように個性に関するカリキュラムが存在し、その度に『無個性の子はこっちで』とより分けられる。学友からの奇異の目、嘲りや侮蔑は止むことは無く、他の事で見返そうと勉強に打ち込んだが、いくら結果を出しても『当たり前』

を持っていないという劣等感は決して拭うことができなかった。

しかし、それでも二割。1万人いれば2千人は無個性だ。

法整備によって公共の場での個性使用が禁じられた。個性を必要としない仕事だつてある。

凡庸な道を選べば、思い詰めるほどに苦悩することは無かった筈だ。

しかし出久は、凡庸を選べなかった。無個性でありながら、ヒーローになるという夢をどうしても諦めることが出来なかったのだ。

幼馴染には馬鹿にされ、教師には呆れられ、母は息子に個性を持たせて産んでやれなかった事を悔いて泣き崩れた。

それでも諦められなかった。窮地においても決して笑みを絶やさず、人々を救い続ける憧憬の存在の姿が、出久の胸の一番深いところにこびり付いて消えなかった。だから進路には一貫してヒーロー養成の名門《雄英高校》を掲げ続けた。

しかし雄英は偏差値70以上受検倍率300倍の超名門校。筆記試験の判定を維持するだけでも並々ならぬ努力が必要だった。

当然、何度も挫折そうになった。

周囲の忠告にはすべて耳を塞いで歩いてきたが、自らの道程に最も不信を抱いているのは出久自身だ。

自分の努力に意味はあるのか。この道の先に憧れたものはあるのか。常にそんな不安が胸中で燻っていた。

だから——偶然にも憧れのNo.1ヒーローに出会えた『あの日』廃ビルの屋上で出久は尋ねたのだ。

『個性が無くてもヒーローになれますか』と。

その言葉の根底にあったのは、自分の努力が無駄ではないことを肯定して欲しいという願い。

リップサービスでもなんでも良かった。たとえ嘘だったとしても、憧れのオールマイトが肯定してくれたという事実があれば、それを抛り所に明日からも無個性な自分に絶望する事無く足掻いていくことが出来るから。

けれど、平和の象徴とまで呼ばれた稀代のヒーローは、何処までも真摯で、現実的であった。

『ヒーローはいつだって命懸けだ。個性が無くてもやっていけるなどは、口が裂

けても言えない』

——それは、知っている答えだった。

消沈する出久に、オールマイトは他の道を歩むことをうなが促した。

しかし、あの時の出久は憧れのヒーローの言葉だろうと、聞き取れるような精神状態ではなかった。

自らの人生の根幹を、他でもないオール憧れの存在マイトに否定されたのだから。

やがて飛び立ったオールマイトが巻き起こした風圧で、彼からサインを貰ったノートが手からすり抜け、フェンスのほうへ転がった。

そのノートはいつかの為にと、ヒーローの個性や戦い方を研究した出久の努力の結晶でもある。

出久は呆然としながらも、覚束ない足取りでそれを追いかけた。しかし、風に踊らされたノートは無情にもフェンスの隙間をすり抜けた。間一髪で手は届かない。ページを飛ばしたかせ、重力に引きずられて落ちていく様は飛べない鳥のようだった。

その光景を、出久は唇を噛み、熱を湛えた瞳で見つめた。

ふと、その日の学校で浴びせられた幼馴染の罵声が過ぎった。

『そんなに個性が欲しいなら来世にかけて屋上からワンチャンダイブ』

デクは何かを振り払うように首を振る。

まさか、そんな馬鹿げた事を実行するつもりは無い。

少し、弱気になっただけ。高所からの景色に魔が差しただけ。

なにより、こんな自分でも死ねば母が悲しむだろう。それだけは嫌だ。

——しかし、その思いとは裏腹に、出久の天地は逆転した。

『へ？』

遊園地のアトラクションでしか味わったことの無いような、圧倒的なまでの反重力。

命綱など無い自由落下。速度はどんどん増していく。

あまりに現実味に無い事態に、反対に出久は冷静になった。

そして、さらなる異常に気づく。

落ちているのは自分だけではない。自分が立っていたビルもまた、遙か上空から落下している。

そして景色までもが一変していた。昼が夜に、近代日本的なビル街は、写真でし

か見たことのないニューヨークに近いものへと、瞬き一つの合間に変貌していた。

——何の因果かこの時、出久は^{ヘルサレムス・ロット}「H・L」の再構築に巻き込まれ、別の世界に迷い込んでしまったのであった。

*

そして転移から七年。

出久は様々な出会い、挫折、運命の悪戯の果てにH・Lで秘密結社ライブラの構成員としての日々を送っていた。

始めは行く当てが無く、クラウスに拾われ、元の世界に戻るために。やがて、自分を受け入れてくれた世界に住まう人々の安寧を守るために。

だが、唐突に始まったこの運命は、終わりをまた唐突なのであった。

「あれ、なんスカねコレ」

声を上げたレオナルドの視線の先にあったのは『孔』だ。

空間に黒のペンキを塗りたくったかのような光沢の無い黒い真円。

クラウスは先んじて二人を手で制した。

「——近づかない方がいい。血界の眷属が密封される直前に編んだ転移術式のよ
うだ」

クラウスが密封した血界の眷属は空間操作に長じた個体のようなだった。密封に瀕して逃走の為に編まれた術ならば、行き先は自らの隠れ家か、それとも血界の眷属達の本拠地か。

何れにせよ、この穴の向こう側に値千金の情報があるのは間違いない。無論、相応の危険も伴うだろうが。

「レオナルド。少し、覗いてはくれないか。以前のように眼を眩ませられないように、ピントを絞って一瞬で良い」

「分かりました」

頷いたレオは、《神々の義眼》を起動する。

両眼に幾何学模様が浮き上がり、青白い光を淡く放つ。

そしてそれは一瞬で消えた。クラウスに言われた通り、一瞬で眼を逸らしたのだろう。

しかし、レオは小さく首を傾げると、もう一度《義眼》を起動した。

「どうしたレオナルド。向こう側には何があった」

「えっと……これ……気の所為じゃなければ……前に見せてもらったデクさんの世界っぽいような……。なんか、ちょっと未来的なジャパンって感じで……あと、デクさんの記憶にやたらと出てきた『AL^オLM^ルIGH^マT^ト』って人の広告が街中に溢れてるんで多分間違いないと思います。ちょっと待ってください、今見せます」

一拍おいて、出久とクラウドの眼前にもレオと同じく、青光の幾何学模様が浮かび上がる。

《義眼》の能力の一つ、視覚共有だ。

そうして与えられた光景に、出久は目を剥いた。

「本当に……僕の世界だ……」

上空から俯瞰するような視点で広がる、自らが生まれ育った世界。

しかも覚えのある街並み、自宅から中学校までを繋ぐ出久の通学路だ。

建物に風景、七年どころか一ヶ月も経っていないように思える。

あまりの懐かしさに、瞳が熱を帯びるのを感じた。

しかし、郷愁に耽る間もなく、立ち上った爆炎が異常を知らせた。

「うおっ、あっちでもなんか事件っスカね」

「レオナルド」

「分かりました」

電子マップを拡大するように、爆炎の傍へと視点が移動する。

そして明らかになった事態に、出久は声を上げた。

「かっちゃん!？」

「知り合いかね」

「幼馴染です！仲が良かったかは、分からないけれど……。あれは?!」

幼馴染を襲っているのは、あの日オールマイトと出会う切っ掛けとなったヘドロのヴィランだった。よくよく見れば幼馴染の容貌は、遠い記憶と差異が無いように思える。

——もしも、これが自分が転移したあの日だと言うならば。

(まさか、あの時僕がオールマイトを引き留めたから!?)

視線の先で、幼馴染は今もヴィランのヘドロ状の身体に飲み込まれるまいと必死でもがいている。

個性である《爆破》を駆使して、かつて出久が羨んだ狂氣的なまでのタフネスと反骨心をもって懸命に。

周囲にはヒーロー達の姿も見えるが、敵の流体による物理無効と、爆豪の抵抗による絶え間ない爆発に二の足を踏んでいる。

(僕が……僕が行ければ……！)

この穴を通れば、向こう側に行けるのだろうか。

出久に一瞬過ったのはそんな考え。しかし——可能だとしてもそれは出来ない。

ライブラは近々、血戦とも言える大きな戦いを控えている。

七年で培った出久の力は、微力ながらも戦力の足しになる筈だ。

(僕はまだ恩を返せていない。クラウドさんに、この世界に……！)

幼馴染を助きたい。けれどこの世界も護りたい。

今いるこの世界は出久の中で、前の世界と比べることが出来ない程に大切なものになっていた。

強く握られた拳。指先が掌に食い込み、血が滴る。

それでもどうにか、出久は深く、深く、呼吸を落ち着けることで、昂った衝動を押さえつけた。そして……この世界で何度も見てきた非情な決断を下そうとした。

しかし、その瞬間、ヘドロに吞まれていた幼馴染が辛うじて顔を出した。

喘ぐように空気を吸い込み、再び飲み込まれるまいとしてあがく彼の瞳は色濃い恐怖に染まっている。

そんなハズがないのに、一瞬目が合った気がした。

保育園から中学校まで共に過ごした中で、一度も見たことがない、勝気な彼の怯えた表情。

歯の根を震わせ、涙を湛えた瞳で何かを訴えかける弱々しい表情。

それは——『助けを求める顔』だった。

「ああ……!!」

「……」

「……」

——葛藤する出久の後ろで、レオとクラウドの二人は顔を見合わせると、まるで悪童のような笑みを浮かべた。

*

商店街に、悲鳴と怒号が飛び交っている。

その中心で暴れ狂うヴィランは、自身の個性であるヘドロ状の身体に一人の中学生——出久の幼馴染である爆豪勝己ばくごうかつぎを取り込み、ヒーローを牽制している。

抵抗する勝己の個性《爆破》によって周囲は火の海となり、更にはヘドロ男の物理攻撃無効の流体の身体に対抗できるヒーローが現場に居らず、事態は膠着していた。

その渦中に一人の男が文字通り空から降り立った。

ネイビースーツに、グリーンのカラーシャツ。まるでイタリアの伊達男のような装いを血塗れにして、その場の誰よりも重傷を負いながらも、彼は不敵に口端を釣り上げた。

「まったく……乱暴だな。あの人たちは！」

*

「行ってしまったな」

「いや、行ってしまったってか、僕らが孔の中に蹴り飛ばしたんですけどね」

もう、ゴルフのホール程度まで狭まった異世界への孔を見つめながら、二人は笑う。

「でも、心残りだろうなデクさん。クラウドさんに恩返しするっていうのが口癖だったじゃないですか」

「その事なら心配ない。デクくんが私に返すべき恩など初めから無いのだから」

「……それスティーブンさんも言ってましたけど、どういう意味なんですか？」

「私とスティーブンが彼と出会った時の話さ」

「異界と人界が交わった『あの日』、一人の子供が顕現した血界の眷属に捕らわれた」

「その場に居た私達は手をこまねいたものさ。何せあの時はまだ密封する手段も無かった。勝ち筋は皆無だったと言っている」

「それでも飛び掛ろうとする私をスティーブンは必死で止めた。周囲には他にも大勢の民間人が居た。下手に刺激して血界の眷属が暴れ出すよりも、子供一人で満足して帰ってくれるのを待つのが賢い選択だった。私は葛藤し……結局は最善かつ最悪のその策に甘んじようとした」

「そんな私達の前で彼は飛び出した。血界の眷属の強大さが分からなかったワケではないだろう。『行けば死ぬ』そう理解していながらも彼は子供を救うべく血界の眷属立ち向かったのだ」

「結果、奇跡的な援軍があったことで、どうにか血界の眷属を退けることは出来たのだが、事が終わった後に私は堪らず彼に聞いたよ『何故』と」

「彼はこう答えた。『あの子が助けを求め顔をしていた』と」

「私は困難に立ち向かう時、あの時の彼の姿と言葉を思い出す。彼は私に決して折れない勇気をくれたのだ」

「私が彼の世話をしたのは掛け替えのないものを貰った対価だ。つまり彼が私への恩だと感じていたものは、私が彼に返した恩に他ならない」

「はは、昔から変わらなかつたんスね。デクさん」

レオとクラウスはもう会うことの無いであろう友に思いを馳せ、笑う。そしてクラウスは、今にも消えそうな孔に向けて激励を送った。

「——征け、緑谷出久。この世界は我々が責任を持って救ってみせる。だから君は君の世界を救ってみせろ」

「ああ！そういえば、あの人まだチェインさんに告白してなかったですよね?!
それも心残りなんじゃ……」

「……………そちらの心残りの責任は負いかねる」

*

着地した出久は顔を上げる。

今度こそ、確かに爆豪と目が合った。

身体が動く。駆け出していた。

クラウスと出会った、あの日のように。

爆豪がかつて自らを虐げていた相手だと言う事は関係ない。

血界の眷属との戦闘によって失血死寸前なんて事は承知の上。

「なんだあ！テメエ、ヒーローか？！！」

向かい来る出久に、ヘドロ男が叫びかける。

ヘドロ男は自らに迫る『青年』が、数時間前に襲った『少年』と同一人物だという事になど気付く由よしもないだろう。

出久から自然と、笑みがこぼれる。

あらゆる意味で七年前と同じ状況。

しかし、あの日とは決定的に違うことがある。

(救う力が僕に在る！)

出久の革靴に内蔵された機構が起動し、鋭利なエッジが足裏を突き刺した。流出した血液は靴底へと装填される。

かつて出久は、無個性である自分に絶望していた。

しかし、迷い込んだ世界で、出久は自らに秘されていた《個性》を発現させた。きつと世界を渡らなければ気付く事はなかっただろう、向こうでの出会いが無け

れば人を護る力に変わる事はなかったであろう。

その《個性》ちからの名は——。

オールマイティ・ブラッド
《全能血液》

出久の血液型であるO型は、あらゆる血液型の人間に輸血することが出来る『万能の血液』などと呼称される事がある。しかしそれはO型血液には血液型抗原がなく他の血液型の抗体と凝集反応を起し辛いというだけで『万能』と表現されるのは、あくまで比喻に過ぎない。

しかし、出久の血液は真の意味で万能だ。

出久の血液を輸血すれば、相手が何型であろうと、血液自体が対応した型に変質する。

何型の血液を、どんな病にかかった血液を輸血されようと、出久の意志ひとつで無害なものへと自在に変質させることができる。

この《個性》そのものは一切の戦闘力を持たない。

だが、向こうの世界で血界ブラッド・フリードの眷属と戦う者達——牙狩りに伝わる、属性を付与した血液を操り闘う《血法》けっぼうと呼称される戦闘術を修めるにあたり、出久の個性は

天賦の才能だった。

道 凍 血 式 ダ ル ラ メ ス エ

属性は《凍結》。
迫りくる汚濁おだくの鞭打べんだを掻い潜り、
放たれるのは高速の蹴撃しゅうげき。
血液に付与された

靴底の機構から霧状に散布された血液を、蹴りに乗せて敵に叩き込む。

一発、二発、三発、四五六七八九十——。蹴脚閃く毎に、爆豪に纏わりついていたヘドロは剥がれ飛び、同時に周囲の気温は急激に低下する。そして——。

「絶対零度の地平!!」

裂帛の咆哮と共に商店街は氷河と化した。

あんぐりと口を開けた野次馬たちが、その光景を仰ぐ。

ヘドロ男の個性で最も厄介な性質は、流体である事による物理攻撃無効。しかし絶対零度を前にして、そんなものが何の意味を持つと言うのか。

ヘドロ男は為す術無く氷の像オブジェと成り果てた。

ケース・クロースド
事件解決。

その場に居た誰もが息を呑み、吐く事さえまならない。

あまりに電撃的な解決に、心はまだ事件の中に取り残されている。

しかし、数秒の沈黙の後、理解が追い付くと、パラパラと拍手が起こり、感嘆の聲が沸き上がり、やがてそれは大気を震わす程の喝采へと変わった。

一方、一瞬の攻防の中で引き摺りだされ、今も出久に抱えられている爆豪は、苦

痛が突如として終わったことに呆然としながらも、自らを助け出した人物を見た。爆豪勝己は傲慢不遜を擬人化したような人物であり、命の危機から救われたとしても素直に感謝できるような性格ではない。

それどころか、常ならば敵に敗北し、助けられ、あまつさえ横抱き——つまりは『お姫様抱っこ』されたとなれば、その屈辱に怒鳴り散らし、暴れ出していたことだろう。

けれど、そうしなかった。

そんな屈辱くじとを気にしていられない程に、理解出来ない事態が目の前に在ったからだ。

見上げて、目が合った自らを助け出した人物。その面影に唇を噛む。

背が伸びている。特徴的だったソバカスも消え、顔つきは別人のよう。

そもそも思い浮かべた相手は《無個性》のほず。あの氷壁の説明がつかない。

否定する要素は数あれど、肯定する要素はまるで見当たらない。

しかし、曲がりなりににも幼馴染である爆豪は、直感で真実に辿り着いた。

「テメエ……デクか……？」

「うん。僕が来たよ」

物語は動き出す。本来とは違った形で。

ここから語られるのは、超人秘密結社元構成員。緑谷出久が最高のヒーローになるまでの、活動の記録である。

とびらーひらーけばー♪

《Profile》

name 緑谷出久 (21)

birthday 7/15

height 182cm

like カツ丼

love チェイン・スメラギ皇

quirk オールマイティ・ブラッド全能血液

○誰にでも輸血できるぞ！

○誰からでも輸血できるぞ！

○超性能の輸血パック人間だ！

○本人は実は元からあった個性だと認識しているぞ！

○でも本当は異界H・Lに適応するために少しずつ体を変質していった結果の突然変異だぞ！

【追記】

はたけやま様よりイラストをいただきました！

ありがとうえ……ありがとうえ……！



第2話 誤算

「というワケでデクさんは元の世界に帰りました」

レオナルドは、結社のミーティングに控えてやって来た銀髪褐色のチンピラ然とした男——ザップ・レンフロに向かってそう告げた。

「——ああ?」

静謐としたミーティングルームに、呆けた声が溶ける。

ザップは顔面に『何言ってるんだコノ陰毛は』とありありと書き記して、古いテレビの調子でも見るように、ペしペしとレオの頭を叩く。

「……」

考えていることは明らかだが、口に出していないものを咎めるわけにもいかな。レオはこめかみに血管を浮かばせながらも心を落ち着けると、ザップでも理解

が及ぶよう猿に言葉を教える心持ちで懇切丁寧に経緯を説明した。

ザップはレオが言葉を継ぐたびに瞳を見開き、蒼褪めていく。そして遂に帰還が真実だと理解すると、力なく膝から崩れ落ちるのであった。

「ウソ、だろ……」

両の手を床につき、吐き零したのは憔悴しやうすいしきった眩き。

大袈裟——とは言えないだろう。

なにせ、別れを告げることも出来ずに訪れた永遠の離別だ。

生きているとはいえ、それは世界の壁を隔てた向こうの話。ある意味で、それは死にも等しい。

ましてやザップにとって出久はただの同僚ではない。経緯はどうあれ同じ師に師事した弟子でもある。

きつと——レオとはまた違った大きな感傷があるのだろう。

「ザップさん……」

滅多に見ることのない、ザップの弱々しい姿にレオナルドの涙腺が刺激される。

しかし——。

「今度鍛え直すつって師匠ジジイの本拠のド秘境に呼ばれてんだぞ!? あんの陰毛頭ア!
それでケツ捲まきったんじゃねエだろうな!? 生贄いけにえカムバアアアアック!」

「知ってましたアンタそういう人ですよ!」

よくよく考えれば——否、考えるまでもなかった。

この極めて自己中心的な女誑たらしが、男との別れなんぞでイチイチ悲嘆に暮れる筈もなかった。

深く溜息をついたレオは、行き場を無くした涙を拭い、ザップの代わりとばかりに自らが感傷に耽る。帰還の一因を作ったのはレオナルドとはいえ、彼もまた、突然の別れを消化しきれたわけではないのだ。

視界を閉ざせば思い起こされる出久との記憶。

思えば変人奇人狂人の見本市であるライブラにおいて、彼は貴重な常識人だった。レオが新人として結社に入った時、世話を焼いてくれたのも出久だ。

説明はちゃんとしてくれるし。

理由のない暴力を振るわないし。

危機に陥った時には、ヒーローのように助けてくれた。

「……」

——レオナルドはふと、今後のヘルサレムズ・ロットでの生活を想像した。

「デクさんカムバアアアアアック！」

「うるっせえ！ テメエが蹴り落としたんだろうがMark2！ 今スグもっぺん孔ブ

チ開けて釣り上げてこいよマジで！」

レオとザップは共に己の今後を考え、頭を抱えて絶叫するも、その声が出久に届くわけもない。

「はああ……。でもやっぱ一番大変なのはデクさんっすよねー。見た感じアッチの世界も結構物騒な感じだったし。この前の事件も無事解決してればいいけど……」

叫び疲れてソファに体を預けたレオは、そう溢した。

出久の故郷は『個性』と呼ばれる超常能力がひしめく異世界だという。もちろん、危険度は^{ヘルサレムズ・ロット}E・「とは比べるべくも無いのだろう。それは出久自身が言っていた事でもある。だが、それでも心配なものとは心配だ。

「ま、そこんとこあ問題ねえだろ。アイツは」

しかしザップは、不安を膨らませるレオの横で、極めて楽観的な口調でそう断じ

た。

ともすればテキトーに答えただけなのかもしれない。しかし、それでもレオは驚きのあまり普段糸目に閉じている瞳を真ん丸に見開いた。

少なくともレオが結社に入ってから、ザップが出久を認めるような言葉を吐いたのは、嘘だろうが冗談だろうが、これが初めてのことだったからだ。

「あんだ？そのツラ」

「なんでもありません——って痛^{いって}え！なんで蹴るんすか!？」

「蹴られたそうなのツラしてたからだ」

「どんなツラだよ!？」

ザップは微笑ましいものを見るような視線からその内心を察したのか、レオの尻を蹴り上げた。そしてソファへ乱暴に腰を下ろすと、拗ねた子供のように窓の方へそっぽを向いて話さなくなった。

「この人ホント素直じゃねえな……」

再び溜息を吐いたレオは、ザップの視線を追うように、特に意味も無く窓の外へと目を遣った。

(まあ、実際。ザップさんの言う通り、あの人なら上手い事やってるよな)

*

「やらかした……!」

——レオ達の信頼を他所に、出久は両手で顔を覆い、消沈していた。

出久が七年を過ごしたH・Lは、この世の混沌を煮詰めたような場所である。

建物や人がブツ飛ぶのを見なかった日は無かったし、『あ、トンボだ』くらいの感覚で弾丸やロケットランチャーが飛び交っている。酷いときには何の前触れもなく、完遂されれば数十億人が死に絶えるような上位存在の暇潰しゲムが始まったりもする。

出久自身、不意にエンカウントしたゴロツキに内臓をカツアゲされそうになったこともあるし、酒場で騙されて首と胴体を切り離されて売りに出されたこともある。そんな異常が日常となった世界で、出久は多感な少年期を過ごしたのだ。

人間たかだか一、二年海外に留学した程度でカブれて帰ってくることもあるというのに、よりによってあの魔境で七年だ。ならば元の世界に帰還した際に、多少意

識に差異が生まれている事もあるだろう。

「……………元の世界の常識を一つくらい忘れていることもあるだろう。」

「私語を慎むように。10・9番」

「……………はい」

——出久は逮捕されていた。

『公共の場において個性の無断使用及び戦闘行為を禁ずる』。

出久が爆豪救出のために行ったことは、この世界において、れっきとしたとした犯罪だったのだ。

しかし、無断使用にしても爆豪を救出するためだったことは、誰の目にも明らかであり、ヒーローでも手を拱こまねいていた事態を迅速に解決に導いたのも事実だ。当初は警察としても事情聴取のうえの嚴重注意で済ませようとしていたのだが……………。

身分証の提示を求められたのが運の尽き、そして馬鹿正直にH・Lで使っていた免許証を提示した出久も出久だ。

『普通異界二輪運転免許証』。

いったい何が普通なのか。

当然、そんな珍妙な書類がコチラの世界で通用するはずもなく。

—— 罪状上乘せ。『有印公文書偽造、同行使容疑』。

あまりに現実的な罪状を前に、出久は『ああ、帰ってきたんだな』と妙な実感を
得たのだが、こんなことで感じたくはなかったと留置場の床に溜息を溢す。

治癒力が高いというのも今回ばかりは考え物だ。

本来、昨日の出久ほどの重症ならば入院は必至。逮捕されるとしても快癒後とな
るはずだった。

しかしH・Lの幻界病棟までとは言わずとも驚異的な、医療系個性による治療
と出久の血法由来の高い治癒力が相乗してしまい、即日『帰っていいよ』との診断
を受け、豚箱へと直行するハメになった。

しかし、不幸中の幸いか出久は微罪処分として、既に釈放が決まっている。

個性の無断使用については、現場にいたヒーローの一部が結託し、『人命救助を
最優先と考え、敵に有効な個性を所持する民間人に協力を依頼した。その際にヒー
ロー資格者に与えられた裁量の内で戦闘許可を与えていた』と証言してくれていた
ことによって不問となった。

それがあの解決劇に絆ほどされての考えなしの行動なのか、あの場に居ながら苦しい少年を見ていることしかできなかつたヒーローの覚悟ある偽証なのかは分からないが、どちらにしても出久にとってはありがたい話だった。

また、文書偽造についてもH・Lの免許証とコチラの世界の免許証とでは様式が大きく異なつたため、『たとえ偽造だとしても何か悪質な行為に利用できたとは思えない』と判断され、嚴重注意で済んだ。

しかし、ならば何故、出久はこうして項垂れているのか。

それは釈放の段になって、出久の事情だからこそ発生する問題があることに気が付いたからだ。

そもそも微罪処分とは、情状酌量の余地アリと判断された被疑者を、刑事手続を行わずに釈放することなのだが……。

当然、身元引受人が必要となる。

そして出久の場合、それは母しかない。

——さて、今の自分の姿を見て母は一体どんな反応をするだろうか。

良くて卒倒。

最悪、息子ではないと警察の前で訴え出られるかもしれない。

「……」

最早脱獄した方が簡単に済むのではという考えがチラつくものの、出久はそんなH・L流の思考の危うさに思い到り踏みとどまった。

早々にコチラの感覚に戻す努力をしなければ、更に取り返しをつかない失態を犯すことになりかねない。

そうこう気を揉んでいるうちに、看守が出久を呼びに来た。

どうやら母が迎えに来たようだ。出久は付き添いの警官に連れられて、一晚過ごした格子を後にする。

世話になった他の警官にも挨拶し、正面玄関へ向かう途中の階段を下る。

すると、最後の曲がり角の先から声が聞こえた。

「すみませんこの度は息子が——」

それは七年ぶりに聞く母の声だった。

心臓が早鐘を打つ。出久はそれを血流操作で強引に静めた。

センチメンタルに浸るのは後でいい。まずはどうにかして自分だと気付いてもら

わなければならぬ。

アイコンタクト。それでもダメなら血法か。

その他に、何か打つ手はあるだろうか……。

なんとか母に察してもらえるように全力を尽くさなくては……。

出久はブツブツと自問自答を繰り返しながら歩く。

そして意を決し角を曲がると、出久は祈るように母へと視線を送った。

(頼む！母さん気づいて……て……)

——きつと、一晩帰らなかった息子を案じていたのだろう。母の目にはクマが

浮かび、泣き腫らした跡があった。

「出……久？」

不安げに、自らを呼ぶ声が耳朶じだを打つ。

瞬間、それまで考えていた賢さかしらな企みは彼方へと消える。代わりに押し寄せて

来たのは、衝動というのも生温い程の感情の波濤。律する事など……出来るはずも

なかった。

出久は気が付けば、記憶よりもずっと小さくなった女性を、嗚咽おえつを漏らして抱き

締めていた。

*

昨日、息子が帰らなかった。

部活動をやっていない息子は、特に用事がなければ18時には必ず帰宅する。それが、昨日に限って21時を回っても連絡一つなかった。

担任の先生に連絡を取ったところ、下校したことは確からしい。

同級生の家に電話をかけてもみたが、一向に行方が分からない。

幼馴染の爆豪君の家にも電話をしたけれど、あちらはあちらで今ニュースで持ちきりの事件に巻き込まれたらしく、それどころではないようだった。

鳩尾を少しずつ押されていくような不快な圧迫感。

行動すればするほどに、何事もない可能性だけが潰れていき、自らで自らを追い詰めていくことになった。

爆豪君のニュースに紛れて流れた、通学路の側で廃ビルが消失したというニュースが、嫌に耳に残ったのは偶然だろうか。

私にはそれが、虫の知らせのようなものに思えてならなかった。

出久が廃ビルに行く理由なんてない。出久が関係している筈がない。そう思いつつも現場に向かう足は止められなかった。

廃ビルの跡地は規制線によって立ち入りが禁止されていた。私は中の様子を窺うため、その周囲を何度も歩いた。

——そして、息子のノートを見つけた。

それは、息子が研究と称してヒーローの個性やプロフィールを記していたノートだ。

吐きそうだった。意味もないのに、その場にノートを投げ捨てて、見なかったことにして現場から逃げ帰った。

息も絶え絶えに辿り着いた玄関先の鏡で見た自分の顔は、とても見れたものでは無かった。

酷い寒気にさいな苛まれ、毛布に包まるも震えは止まらない。

夫に連絡をしなければとも思ったが、『大丈夫』と自己暗示のように自分に言い聞かせ、精神の均衡を保つので精一杯だった。

だから深夜、警察から息子が保護されたと連絡が入った時には、本当に、本当に、心底に安堵した。

何か良くないことをしたとかどうとか言われた気もするが、生きてさえいればそれでいい。

そうして私は一睡もしないまま、朝一番で警察署へと迎えに行ったのだが。

一日ぶりに会った息子は成人していた。

何を言っているか分からないと思うけれど、私も分からないのだから説明しようがない。

「……」

私は処理限界が近づいた脳を癒すため、ストローでアイスティを啜る。

ここは警察署から程近い喫茶店。目の前では随分と大きくなった息子を名乗る青

年（21）が、困ったような表情で今もこちらを窺っている。

「ええと……要約すると、昨日の学校帰りに違う世界に迷い込んで、そこで七年冒険して帰ってきた……？ 何とかと神隠し、みたいなの……？」

私の解釈に出久は僅かに不服そうにしたが、概ねそうだと頷いた。

私はジッと出久の顔を見る。

確かに、仕草や表情は記憶の息子の面影を色濃く残している。

出久か出久じゃないかと問われれば、間違いなく出久だ。

けれど私の心は未だ半信半疑でいる。

異世界だのなんだのと、そんな荒唐無稽な話に『なるほどお疲れ様』と納得できるほど私の肝は据わっていないのだ。

……もしやビルを消失させた犯人が、現場で攫った出久になりすまして、何か良からぬことを企てているのでは？ そんな可能性が脳裏に過る。

何せこの『個性社会』。他者に変身する個性を持つ人は少なくない。

少し発想が飛躍した気もするが、昔テレビの特番でもそんな事件を取り上げていた。現実にはありえない話ではないのだ。異世界がどうのこうのよりはよっぽど。

……だけど、成長した姿で現れた意味は何なのか。

あえて大きな違和感を作ること、で他の違和感から目を逸らさせようとしている、とか？

何れにせよ、疑ってかかるべきだと思う。

もし想像が現実で、私がまんまと騙されたのであれば、本物の出久はどうなってしまうのか分からないのだから。

「あの、出久……好きな食べ物は？」

「カツ丼だよ？」

試しに質問を投げると、間を置かず答えが返ってきた。

その他にも、家族しか知らないような昔の思い出なんかを聞いてみるものの、何れも淀みなく答えられた。

やっぱり、本物……？

けれど、心を読める『個性』が世に存在する以上、過去のエピソードは根拠として少し弱いかもしれない。

そう思った私は、相手が見せている大きな隙。異世界について問い質してみるこ

とにした。

「この首の傷？前に二ヶ月くらい胴体を失くしてた時期があつて——」

「目が覚めたら僕の体が食材として売りに出されててね——」

「一番の大怪我？寄生された異界生物に中から体を食べられ……違うなそれと同じくらいのは他にも二十回くらい——」

胃が痛くなってきたので聞くのをやめた。

いや、どう考えても作り話なのは分かっている。けれど、妙に描写に実感があるというか……。おええ。

胃の中身が込み上げてきた。出久は席を立ち、私の背中を擦さすってくれた。

「……そりゃあ、信じられないよね」

「出久、えっと……」

「ううん。簡単に信じられたら逆に心配になっちゃうって。……暫くはどこかホテルにでも泊まることにするよ」

そう言って、出久は立ち去ろうとした。悲しげな笑みに心が痛む。

引き留める言葉が喉元までせり上がるも、腹の底に沈殿した違和感や疑念がその

足を引いてしまう。

「そうだ。最後に1つだけ。お母さんにどうしても言いたかったことがあるんだ。僕ね、個——」

出久が最後に立ち止まり、何かを言いかけた。

しかし、それを遮るように——爆音が轟いた。

まるで間近で大太鼓を叩かれたような、腹の底に響く重低音。

周囲の客が慌ただしく立ち上がり、窓の外を指さした。

私の視線も音源へと無意識に吸い寄せられる。

音と衝撃の発生源。それが先程までいた警察署で起きた爆発だと視認した頃には、飛来した大きなコンクリート塊が、店の窓際に面した通りを走る車の一台を圧し潰していた。

一拍遅れ、爆発炎上する車。

後続車はソレを避けようとして、思い切りハンドルを切ったのだろう。速度を落とさないままに車の鼻先はコチラを向き、瓦礫をジャンプ台にして飛び込んで来た。

突如襲い来る『非日常』。

視界を埋め尽くした黒い鉄塊。隔てるものはガラス一枚。

——走馬灯が実在するのだと、そのとき初めて知った。

目の前で。フィルムの早回しのように私の人生が流れていく。

その大半が出久との思い出だった。

赤ん坊の出久。保育園の出久。小学生の出久。中学生の出久。

そして、最後。

引き延ばされた時間の中で見たのは、私を庇おうと身を乗り出した『今』の出久だった。

——ああ、そうだ。こういう子だった。

小さい頃からオールマイトの真似をして。

そんな力も無いのに……そんな力をあげられなかったのに、困ってる人を助けるんだって、青タンこさえて誰かを守ろうとしていた優しい子。

私が、守らなきゃ。

違和感だとか、不信感だとか、その瞬間にはどうでも良くなって体が動く。

私もまた、出久を庇うべく飛び出した。

破滅的な破砕音が鳴り響き、世界が揺さ振られるような振動が全身に伝播する。私は真っ白になった頭のまま、馬鹿みたいに早くなつた呼吸を必死に整えた。

(呼吸、呼吸……？私、まだ、生きてる？)

私は恐る恐る瞳を開くと、自らの命を脅かした原因、その結末を探した。縮こまった首を伸ばし、通りの方へと目を向ける。

庇うために飛び掛かった私を受け止めた状態で、高く蹴り上げられた出久の脚。その先では、ガラスを破り店に鼻先を突っ込んだ車が、外壁ごと氷漬けになっていた。

「大丈夫!? お母さん……!」

切迫した声につられて顔を上げる。

出久の顔は、焦燥に満ちていた。

それは昨晚、散々鏡で見た私の顔によく似ている。

しかし決定的に違うのは、そこに頼りなさだとか、危なっかしさだとかが一切感じられないこと。

こんな事故に遭ったばかりなのに、息子が居る今この場所が、世界で一番安全な

のではないかという不可思議な確信を覚えた。

そして、私の無事を確かめ、安堵した出久の表情は酷く大人びていて。

それらは半信半疑だった息子の七年を私に信じさせるに足るものだった。

だが、

(それ、よりも)

「出久、これ、個性……?」

「うん」

「ホントに……?」

「向こうにいるときからね、ずっと伝えたかった」

「ありがとうお母さん。僕はヒーローになれるよ」

急激に、瞳が熱を持つ。

かつて私は、この子の前で無様にも泣き崩れた。

息子に夢のスタートラインに立つ資格すら与えられなかった事が悔しくて、それ

でも諦めないこの子が痛ましくて、泣き喚き、赦しを請うただ。

今思えば私が苦しみから解放されたかっただけだったのだろう。きっと出久に

は、自分のせいで母親を泣かせてしまったという傷を与えてしまっただけだ。

歪んでしまっても……おかしくはなかった。

だけど、それでも真っ直ぐに成長した息子が今、目の前にいる。

「うえええええええええええええええええん」

「お、お母さん!？」

「無事でよかったよおおおおおおお」

理屈なんて全て置き去りにして、感情だけで全ての疑念が氷解する。

私はようやく、一切のわだかまり無く息子の無事を喜ぶことが出来たのだった。

しかし——その喜びに水を差された。

警察署の方角から禍々しい緋色の輝きが立ち上ったのだ。

それを見た出久は表情を険しくして立ち上がる。

「ごめん。お母さん、行かなきゃ」

「出久……?？」

「大丈夫! あんなもの、お母さんの所には絶対に行かせないから!」

安堵したのも束の間、遠ざかっていく背中。

待つて。危ない事はダメだよ。一緒に逃げよう。

口を突いて出そうになる言葉は無数にある。

けれど、今かけるべき言葉はそのどれでも無い気がした。

「頑張つて！」

振り返った出久は、驚きに目を瞬かせている。

——もう、この子は私の許を巣立っている。私が守つてあげなきゃいけない存在じゃない。

その成長を傍で見守ることが出来なかったことは悔しいけれど。

もう手を引いてあげられないことは寂しいけれど。

帰る場所になってあげることくらいは今でも出来るだろう。

「カツ丼！作つて待つてるから！」

「うん……！！行つてきます！」

*

「Holy shit……!!」

時を同じくして、警察署。

No.1ヒーロー、オールマイトは崩落した警察署の中で、異形のヴィランと対峙していた。

ヴィランの姿は『腕』としか表現しようがない。

人間の腕を肘から切断したようなソレが、五指を虫の足ののように踊らせ、歩いていた。

肘の切断面からは無数の触手が伸び、その全てが署内に居る警官に突き刺さっている。

触手が震えると、ギュボと水音が響き、数多の悲鳴が轟いた。血液を吸い出した触手がバレーボールのように膨らみ、それは触手の中を進み、やがて『腕』の中へと取り込まれた。

死によって作り出された静寂の中で、異形は静かに呟いた。

「タリ無イ」

《Profile》

name: ザップ・レンフロ

birthday: 11/25

height: 178cm

like: 金

love: 女

ability: ひきつぼしりゆうけつぽう斗流血法・カグツチ

○金と女にだらし無いぞ！

○常に借金まみれだ！

○主な収入源は女性からのお小遣いだ！

○仲間達からは『銀の糞』シルバースット『度し難いクズ』『ダメ男のロイヤルストレートフラッ

シュ』と呼ばれ親しまれているぞ！

○でも戦闘に関しては超天才だ！

○『火』属性の血液を自在に操る『斗流血法・カグツチ』の継承者だ！

○エスメラルダ式血凍道を習得した出久を面白がって、斗流血法を教えようとし

たぞ！（時給100ゼロロ）

○だけど天性と感覚で教えるザップの指導は、努力と理論で習得しようとする出久とクソほど相性が悪くて三日で飽きたぞ！

○最終的に自分を連れ戻しに来た師匠に、継承者候補として出久を生贄に捧げたぞ！

第3話 『腕』

超常能力《個性》の出現によって、世界はあらゆる面での改革を余儀なくされた。それらは司法から社会制度の末端に至るまでと様々だが、その中でも嚴重に定められ、なおかつ誰にでも関わりがある改革とさえ言えば、やはり遺体の取扱いについてのものだろう。

理由は幾つか挙げられるが、発端となったのは一件の爆発事故。それは《発火》の個性所持者を火葬した際に発生したものだ。

『発火能力者を火に焼べる』

言葉にするにも滑稽で、現代においては万人が失笑を漏らすような珍事件だ。しかし、個性が創作物における超能力ESPのような、不可思議な力だと大衆が誤認していた個性黎明期においては、往々にして見られた無知が引き起こす事故だった。

そう、個性は決して不思議なパワーによる謎の現象などではない。

どれだけ不可思議な現象を引き起こそうと、それはあくまでも身体機能によるものだ。超音波を発するコウモリの発音器官のように、あるいは変色するカメレオン

の皮膚のように、特殊な現象を引き起こすための器官が身体のどこかに必ず存在する。一口に《発火》の個性といっても、無から火を生み出しているワケでは決していない。専用の器官を用いて発火に至るまでの科学的な工程を確かに行っているのだ。

ある者は指先に生まれ持った特殊な器官で気体を操ることで発火させた。

ある者は集光機能を宿した眼球によって太陽光を収束させることで発火させた。

そして、件の火葬くたんされた遺体の個性発火の仕組みは、個性由来の臓器によって生成された可燃性のガスを火種に発火させるといったものだった。

つまり事故は、死後も密かに遺体内部に蓄積し続けていた個性由来のガスによって引き起こされたものだったのだ。そして代表的なこの事例を皮切りに、次々と類似する個性事故が多発することとなる。それによって、死後の解剖——正確には個性の解明を義務化せざるを得なくなったのだ。従来の解剖の意義である事件性の有無の確認等は勿論のこと、何より純粋な安全管理の為に。

某県医大 法医学解剖室

無機質な部屋の中では、二人の個性監察医が県警から緊急の解剖依頼があった遺

体の到着を待っていた。

「やはり少し……動きづらいですね。研修医時代以来ですよ。コレを着るのは」
酷く籠った男の声。青年は厚手の防護衣を身に纏い、可動域を確かめるように腕を動かしている。

「アタシは10年ぶりってところかね。ま、怪我あしたくなけりゃ大人しく着ていることだね」

応じるのは、しわがれた女性の声。壮年の女医は落ち着き払った様子で、久方ぶりに使う器具を検めている。

彼らが客観的に見ても動きづらそうな防護衣を身に纏っているのは、言うまでもないが安全のためだ。

この現代においては、治療・解剖等の目的を問わず、医師が直接執刀を行うのは極めて稀なことなのだ。なにせ、昔は光る、火を吹く、風を起こすと単純だった個性は、世代を経るごとに複雑化が進み危険性を増している。個性が明らかになっ
ていない人体にメスを入れることは、爆弾処理に例えられる程であり、本来であれば
医師の安全を考慮して、遺体を頑強な手術室に置き、別室からマニピュレーターを

操作して遠隔で行うべきものだ。

だが、そうすることが出来ない事情があるからこそ、彼らは防護衣を纏い手術台の前に立っている。

「しかし、一体どんな個性なのでしょう。写真に映らないなんて」

青年は、事前に共有された遺体の情報を反芻して呟いた。

現場写真を撮った鑑識官からの情報によると、現像した写真にはその姿が写されていなかったという。

「ただ見えないだけなら、光や色素へ干渉する能力がベターだが……今回の場合、肉眼では像を捉えられるが写真には写らないのが肝だねえ。可能性としては肉眼とレンズの機能の違いの穴を突くような個性……。可視不可視が肉眼とカメラで逆であれば、他にも個性の候補に挙げられるんだけどね……。アンタの方はどう考える？」

女医師に問い返された青年医師は、少し沈黙を置いてから、思いついたように口を開いた。

「個性『吸血鬼』なんてどうでしょう。ホラ、鏡や写真に写らない——なんて聞

いたことがありますか？」

女医師は青年医師の突拍子もない言葉に、一瞬呆けたが、やがて肩を震わせ始めた。

「くく、面白いことを考えるじゃないか。い、いや、馬鹿にしているわけじゃないぞ？ 最近の個性は開けてビックリなんてことが多いからね。この仕事をするうえで型に囚われない発想は大切だ。だけどクソ真面目な君が言ったと思うと……くふふふふ」

不謹慎だという自覚はあるのだろう。必死に笑いを押し殺そうとしている女医師に、青年は眉を顰める。

「悪かったですね。普段は面白味のないクソ真面目で。まあ……少し高揚していたことは認めますが」

「ぐふふ……高揚？」

「実は、ヒーロー志望の妹が例の事件を気にしていました」

「ああ、なるほどねえ」

これから運び込まれる遺体は、昨日発生した『廃ビル消失事件』の現場近くで発

見されたものだ。

事件の現場には他にも学生のものと思われる私物が散乱していたことから、消失に巻き込まれた民間人がいる可能性があると考えられている。その為、事件に関連があると思われるその遺体の個性の解明ひいては身元の特定が急がれていた。

発見された遺体が消失の原因になった人物のものであれば、事件の解明ひいては被害者の救出の大きな助けとなるだろう。

解剖医の仕事というのは、基本的に終わった後の始末だ。今生きている命の為に仕事をする——言うなればヒーローのような仕事をする機会は滅多にない。

「そりゃあ、お兄ちゃんとしては格好いいところを見せたいねえ」

「申し訳ありません。気持ちを切り替えます」

「分かっているなら構わないさ。遠隔執刀と直接執刀は別物だ。浮かれてかかる足元掬われるよ。まあ、安心しなよ。万が一の時は、私の個性で助けてあげようじゃないか。ほら、『吸血鬼』は流水を嫌うって話もあるだろう？」

「……勘弁してください。それに先生の個性って、以前親睦会で披露していた百均の水鉄砲みたいなアレですよね……？」

「ほう？ なにか文句があるのかね？ 使えば孫が笑顔になる最高の個性だが？」
女医師は大げさに肩を竦めておどけて見せた。

そして程なくして、県警から遺体が到着した報せが届いた。

室外から遺体を手術室内に搬入するための昇降機が稼働し、室内中央に自動的に大型の機械箱が運び込まれる。『棺』と呼ばれるこの箱は、ヴィラン護送用の移動監獄と同じ特殊合金で製造されており、耐毒・耐火・耐衝撃、内外からのあらゆる個性攻撃に備えたものだ。

この中に、例の遺体が収められている。

女医師の指示を受け、青年医師は『棺』に歩み寄る。

『棺』の操作パネル上で青年医師の指が踊り、それを機械音が追いかけた。

^{つつが}恙なく認証が行われると、堅固な外装は、腐敗抑制のための冷気を漏らしながら重々しく展開した。

頭わになったのは……『一本の腕』だった。

そして――。

『うわあああああああああああああ！』

手術室の外、室外から記録の為にモニター越しに立ち会っていた医師が悲鳴を上げた。

その『腕』に、青年医師は眉を顰め、女医師は言葉を失った。

棺の中の腕に、青年医師は酷く見覚えがあった。

趣味のテニスで日焼けした浅黒い肌、若いながらも多くの施術を経験した器用そうな手指、そして——妹から贈られた組紐の腕輪。

「俺の……俺の腕？」

口を突いて出た荒唐無稽な呟きは、しかして紛れもない真実だった。

長年共にあった体の一部を見間違えよう筈もない。

なら、これは？ いまココに生えているものは？

青年医師は言いようのない悪寒を覚えながら、自らの左肩から生えた腕に視線を向ける。いつの間にか乱雑に引き裂かれていた防護服の左腕部からは、自身の腕とは似つかない病的なまでに白い腕が伸びていた。

白蟻を固めたような色素の薄い皮膚に、鮮血の如き赤で刻まれているのは恐ろしく精緻な刺青。それは思いついた紋様をただ刻んだようでありながら、数式のように

に緻密な規則性を持っている。それは悲嘆を表現しているようでありながら、狂喜を表現している。

幾つもの矛盾を孕んだその紋様は、青年医師の視線を奪った。

——美しい。

そんな場違いな感傷を得ると同時に、頭蓋の内で爆竹が爆ぜたような衝撃が弾けた。

どろり、世界が緋色に染まる。意識が、何かに溶けていく。

まるで自分の存在を一滴の雫にして大海に落としたような、途方もない喪失感。胃が裏返るような吐き気に襲われ、堪えられずに内容を床に吐き散らかした。乾く、渴いてしまう。細胞の一つ一つが乾燥して、ささくれ立っていく。

一体自分に何が起こった？ どうなっている？

ああ、痒い、苦しい。耐えられない。水、誰か水を——。

耐えがたい喝感に、喉に爪を立て掻きむしり、嗚咽を漏らす。引き裂けた喉からは自身の血液が溢れ、それを掬い、舐めて、欲求を誤魔化した。

『——！』

ふと、何かに身体を揺さぶられた。

音が、遠い。靄がかかっている。だが、何かを叫びかけられていることに気が付いた。

『——丈夫——?! ——識は——か——!?!』

声に振り向いた青年の顔が、ほっと安堵と歓喜に染まった。

そこに——水袋があったからだ。

クリスマスにプレゼントを貰った子供のようになり、青年医師はソレに飛びついた。邪魔な包装を破り捨て、爪で袋を切り開いた。噴水のように溢れ出たのは甘美な液滴。それを浴びるようにして飲み下す。

だが、たったこれだけでは一時凌ぎだ。肉体は、なおも恐ろしい勢いで渴いていく。

足りない。足りない。足りないのだ。

「た ri …… ナイ」

*

同日、同時刻。某県警 8 階応接室。

そこに《No・1ヒーロー》オールマイトは訪れていた。

ただし、その姿はTVや雑誌で誰もが知る筋骨隆々とした偉丈夫ではない。

頬がこけ、目が落ち窪んだ不健康な顔に、躓き転べば骨が折れてしまいそうなほ

どに痩せ細った貧弱な体躯。これは過去の戦いで負った傷により憔悴した、彼の

トゥルーフォーム
真の姿だ。

世間に秘した姿を晒し、テーブルを挟んで対面するのは一人の刑事——塚内直正
だ。

日々凶悪な個性犯罪に立ち向かう彼らは、事件現場で顔を合わせることが多く、
今では互いを親友と呼ぶ間柄だ。『平和の象徴』の衰弱という、明るみに出れば確実
に世を乱す秘密を明かしていることが、彼らの関係の深さを何より物語っている。

「なんとということだ……ッ！」

そんな友を前にして、オールマイトは痛切に吐き捨てた。

骨ばった手には、塚内の権限で閲覧を許された『とある事件』の捜査資料の写し
が握られている。

彼の視線は、資料の中の一枚の写真に注がれていた。

そこに写されていたのは一冊のノート。焼け焦げ、煤に塗れた表紙には、ネームペンで《将来のためのヒーロー分析》と記されている。

「……気を落とすな。まだ何かあったと決まったワケじゃない。だいたい……突然ビルが音も無く消し飛ぶなんて誰が予想できる」

「いや、ビル消失以前の問題だ……態々^{わざわざ}あんな場所で現実を突きつける必要は無かった。緊急時とはいえ置き去りにしたのもどうかしていた。相手は未熟な学生だというのに……！ 事件が無くとも魔が差して身を投げたっておかしくはなかった……！」

狼狽するオールマイトを見かねて塚内が慰めの言葉を吐くも、彼はそれを素直に受け取ることはなかった。塚内の言う通り今回の事件は予期できるようなモノではなかった。オールマイトもそれは理解している。しかし、どこまでも善性の人間である彼は、胸の内に溢れる慙愧の念を止められなかった。

「しかし、なんだ、今回の件は君らしくもあるが……君らしくないな」

ふと呟かれた塚内の言葉は、酷く曖昧なものだった。しかし、オールマイトには彼の言葉の意味するところが齟齬無く伝わっていた。塚内はこう言っているのだ。

『少年への言動は『八木俊典』やぎとしのりらしくはあっても、『オールマイト』平和の象徴らしくはなかったのではないかと。」

「ああ……私もそう思うよ」

ファンに『貴方のようなヒーローになれるか』と問われることなど、トップヒーローであるオールマイトにとっては日常茶飯事だ。普段の彼ならば現実的な指摘をしつつも、最後には『諦めるな』と『努力すればきっと叶う』と、希望ある言葉で話を結んだはずだ。

だが、あの少年にはそれをしなかった。否、出来なかった。

それは少年がかつての自分と同じ『無個性』だったから——ということもあるのだろう。

だが、それだけではない。

オールマイト自身、明瞭に言語化することが出来ずにいるが、あの時——視線を交え、言葉を交わしたことで感じた『確たる何か』が彼の口を閉ざさせたのだ。「……搜索は続ける。大丈夫。きっと良い知らせを聞かせてみせる。だから気を落とすな。……平和の象徴はいつも笑顔、だろ？」

塚内は冗談めかして、両手の人差し指で自身の口角を持ち上げた。

偶然ではあるが、その仕草はオールマイトにとって特別な人物を想起させるものだった。波立つ心が少しだけ静まり、歯を食いしぼる力が抜けていく。

「……ありがとう塚内君。直接足を運んだのは正解だったよ」

「礼なんていいさ。君にはいつも無理ばかり掛けている」

僅かに気恥ずかしい空気が流れ、誤魔化すように塚内がティーカップに手を伸ばす。

しかし——塚内の指先はティーカップの取手をすり抜けた。突如としてソファごと仰向けに転倒することになったからだ。

オールマイトの細腕が、突如として塚内を突き飛ばしていた。

『一体何を』塚内が問おうとしたその瞬間——日常が終わりを告げる。爆音、衝撃、突風、水飛沫。青天の霹靂に叩きつけられた情報の飽和。

そして、水煙が晴れ、視界に飛び込んで来た光景に塚内は絶句した。

県警本部が両断されていた。

オールマイトと塚内の間を境界として、まるで薪でも割ったかのように。

事態の発生から数秒遅れて、無数の警報が鳴り響く。そのけたたましい音によって塚内は我に返る。

誰に問うまでもなく異常事態と分かる。そして情けない事だが、事態を收拾するのは一刑事でしかない自分の手に余る事は明白だった。だから塚内は叫んだ。友に向かつて。

「オールマイト！」

塚内が声を上げた時、無二の友は既に最高のヒーローへと変貌していた。

*

オールマイトは塚内の叫びを背に受け、切断された県警本部の狭間を飛び出した。落下の最中、その濡れた断面から敵の個性を分析する。恐らくは水を操る個性。極限まで圧縮された水流に切れないものは無く、ダイヤモンドでさえも容易く切り裂くと聞いたことがある。しかし不幸中の幸いか、そのあまりに鋭い切れ味故に建物が即時倒壊するような事態にはならなかった。救助までの猶予はある。このヒーロー飽和時代、1分と待たずに多くのヒーローが駆け付けるだろう。

「ならば私がするべきは！」

オールマイトは空中を殴りつけ、その反作用で加速する。

向かう先は高圧水流の発射地点。近隣にある医大敷地内、水流で抉れた地面の狭間から覗く地下施設。そこに、オールマイトは流星のように降り立った。

落下の衝撃で立ち昇った土煙を、オールマイトが剛腕の一薙ぎで晴らすと、視線の先、医療施設と思われる一室の薄闇の中で緋色の瞳が瞬いた。

「ッ！」

オールマイトが腕を十字にガードを固めたのは、反射的なものだった。

ほぼ同時に、途方もない衝撃が浴びせかけられる。

「随分な歓待じゃないか！」

オールマイトに浴びせられたのは、先程ビルを両断した超高压水流。

ダイヤモンドすら切り裂く流体の名刀は、容赦なくオールマイトに襲い掛かる。常人ならば1秒にも満たないうちに、挽肉になったことだろう。

だが、言うまでもなく——オールマイトは常人などではない。

超常能力がひしめくこの現代で、存在するだけで犯罪を抑制すると言わしめた超人中の超人だ。

「CALOLINA——SMASHASH!」

筋肉が躍動する。クロスガードの体勢から放たれたのは乾坤一擲のクロスチョップ。

水流が十字に裂け、その余波は衝撃波を生み、ヴィランの体勢を大きく崩させた。ヴィランは膝を突きながらも再度個性を行使すべく掌を突き出す。

だが、遅い。

距離にして20M。オールマイトが地を蹴れば瞬く間に彼我の距離は消え失せる。

「SMASH!!」

ヴィランの腹部にオールマイトの拳が叩き込まれた。

絶妙に加減された剛拳は、その命に指を掛けることなくヴィランの意識のみを刈り取って見せる。

オールマイトは膝から崩れ落ちたヴィランを受け止め、床に寝かせる。ヴィランは壮年の女性だった。

しかし、その姿は異様と言う他ない。例えるならば、一度ズタズタに引き裂いた

人形を、子供が拙い技術で縫い合わせたような……およそ何故動けるのかが分からない。そんな有様だった。

事情は分からない。しかし、幸いここは医大の施設内。手配すれば迅速に処置を受けられるだろう。助かる可能性は……ある。

オールマイトはベルトの内側から携帯を取り出すと、履歴を呼び出し塚内の名前をタップする。

——地上から引き裂くような悲鳴が聞こえたのは、4度目のコールと同時に。た。

跳ね上がるように地上を仰ぎ、オールマイトは飛び立つべく腰を落とす。

その時、何か足首を掴んだ。それは、気絶させたはずのヴィランの腕。

「まだ意識が——!？」

壮年の女性の肉体が、水風船のように膨張した。

*

塚内は悪夢のような光景に目を剥いた。

オールマイトが飛び去った直後、階下からの悲鳴を受けて駆け付けると、そこで

は——人間が捕食されていた。比喻などでは無い、文字通りの意味で。

肘から下で切り落とされた人間の腕のようなその異形は、断面から無数の肉色の触手を伸ばし、貫き捕らえた人間から血液を啜っていた。手元に手練り寄せられた人間に至っては、掌に浮き上がった口腔でもって、齧り付かれ、噛み千切られ、無残な肉片となり果てていた。

「こ……れは……」

開いたままになった塚内の口から掠れるような声が漏れる。次の言葉を発せない。

塚内は凶悪な個性犯罪と長年闘ってきた現場叩き上げの刑事だ。個性を用いた殺人事件を追ったことは数知れず、中には目を塞ぎたくなるような猟奇的な事件だ。て幾つもあった。その結果、塚内は良く言えば成長し、悪く言えば慣れた。

多くの事件を経て塚内は、一般人が見れば嘔吐するような惨状の中であっても、強靱な心を以って事件の解決に尽力することが出来る。そういうベテランの刑事になっっていた。

しかし、その塚内からしても、目の前の光景はあまりにも——。

「giい?」

異形の腕が塚内の存在に気が付いた。手の甲が3cmほど一文字に裂け、そこからギョロと眼球が剥き出した。緋色の視線は塚内の身体をじつとりと舐め上げる。その視線には害意も、敵意もない。

だが、氷柱を丸呑みさせられたような窒息感と悪寒が、塚内の全身を粟立てた。塚内はその視線に覚えがある。

あれは——人間がスパーで肉の良し悪しを値踏みするときと同じ視線だ。

「おっ、うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

『食料として値踏みされる』その本能的な恐怖に支配された体を奮い立たせるように、塚内は咆え猛り、銃口を敵に向け、威嚇も無しに引鉄を狂ったように引き絞る。放たれた弾丸は5発。半ば恐慌に陥りながらの発砲ではあったが、元の腕の良さ故か3発が敵へと着弾する。しかし——。

「すり抜け……た!？」

否。確かに弾丸は異形の腕を傷つけた。

高速回転する9mmの鉛玉は、異形の表皮を裂き、肉を抉り貫いた。

ただ、『すり抜けた』そう錯覚する程に速く、治癒が完了しただけだ。

塚内の所持する日本警察の制式拳銃の装弾数は5発。震える指は、今も引鉄を引き続けているが、無情にも銃火は上がらない。

「くそっ！ くそっ！ くそっ！」

弾は切れた。塚内の個性は戦闘に向いたものではない。もう——抗う術はない。

塚内に向かって無数の触手が殺到し、直前に目の当たりにした無残な死体が、己の末路として走馬灯のように想起される。

しかし、塚内に触れる刹那、全ての触手が爆散した。

異形と塚内の間に遮るように現れたのは、最強のヒーローの背中。

「無事か塚内君！」

「オールマイト！ 助かった！ ツ……！ 君こそ怪我を！」

「下で制圧したヴィランの自爆を止められなかった。周囲への被害を抑えるために少々無茶をしてね。……アレは？」

「分からない。正体も、目的も。思想犯にしても、わざわざ地方の一警察署を襲う

理由は思いつかない。複数犯だったことを考えると、更に他にも仲間がいて、どこか他所で目的を遂げるために、君をここに留めるための陽動という可能性もある」

「しかし—— 黒幕が居るにせよ、居ないにせよ、分かることが一つだけある。少なくとも、目の前のヴィランの目的は……人を喰らうことそのものだ」

オールマイトは塚内の言葉を受けて、拳圧で吹き飛ばされ壁際に転がった異形の腕から僅かに視線を外す。そして、散乱する衣服だと思っていたものが、吸血されて殆どの体積を失いミイラのようになった警官達だと気が付いた。

「Holy shit……！ なんとということ……！」

惨劇の元凶を睨みつけるオールマイトと、ヴィランの視線が交差する。

「た ri 無イ」

異形の腕は、ポツリと眩くと、足代わりの五指を床に突き立てその身を起こす。

「た ri 無イ」「た ri 無イ」「た ri 無イ」「た ri 無イ」

そして堰を切ったように、掌に、手の甲に、手首に、腕に、裂けるようにして現れた口蓋が、一斉に飢餓を訴え、壊れたラジオテープのように繰り返す。

「——！」

そして、それらがピタリと閉口すると同時に、無数の触手がオールマイトに襲い掛かった。

塚内を背にして、オールマイトは手刀で迎え撃つ。オールマイトの本気の手刀は、超高速で振るわれる大鈍のようなものだ。鋼の鞭のような触手の群れを草花でも刈るように薙ぎ払う。切断される都度に触手は再生を繰り返すものの、オールマイトの方が速度で勝る。

——あと数瞬で押し切れる。オールマイトがそう考えた瞬間、まるで掃除機のコードのように触手が腕内へと一斉に取り込まれた。

そして——『腕』に刻まれた精緻な紋様が緋の光を帯びた。

「させるものかッ！」

オールマイトは、その輝きが弓を引き絞るような『溜め』であると察知した。砕けるほどに床を蹴り、体当たりによってヴィランを外壁ごと建物の外へと押し出す。危険な輝きは先手を取った一撃によって霧散する。

飛び出した先は地上7階。噴き上げる突風。空中に、瓦礫とガラス片が舞って散る。そしてそれらが重力に囚われるまでの一刹那、オールマイトは確かに見た。

己の姿と景色を写したガラス片に、眼前の『腕』だけが反射していないことを。それはさながら御伽噺に伝わる夜の王のように。

「君の目的を——」

オールマイトはヴィランに叫びかける。しかし返答とばかりに触手による刺突が襲い来る。それはあまりに雄弁な対話の拒否だった。

「DデEトTロRイOイIト——」

オールマイトは動脈を正確に狙った触手を、拳を引き絞りながら回避する。

そしてヴィランの無礼無法に相応しい返礼を見舞う。

「SスマMマAアAアSッHッシュ!!」

裂帛の咆哮と共に直下に放たれる右拳。それは何の変哲も無い右ストレート。

しかし、そこには宙を殴れば空中機動すら可能にするオールマイトの馬鹿げた筋力が一点に収束されている。

ヴィランは瞬時に硬質の被膜を展開し盾としたが、必殺の剛拳は易々とそれを打ち砕き、まるで威力を減衰されることなくヴィランに着撃した。

膨大な運動エネルギーを余すことなく伝達されたヴィランは、迫撃砲の如き轟音

と共に一条の流星となって駐車場のアスファルトへと流れ落ちた。

オールマイトも僅かに遅れ、下方への拳打で落下速度を打ち消し着地する。そして武士が刀の血糊を払うように拳を一振りしたところで、ベルトの中で携帯端末が震えた。

ディスプレイに表示された名前は、上階に居る友の名前。オールマイトは通話ボタンを押した。

「塚内く——」

『オールマイト!』

端末越しの塚内の叫び、そして背後に迫る気配によってオールマイトは後方に向けて防御を固めた。次の瞬間、交差した腕に衝撃が走る。

衝撃に耐えかねたアスファルトが大きく陥没し、オールマイトの巨体が地面に沈む。

オールマイトはガードの隙間から、襲撃者を見上げた。踵落としの体勢でオールマイトを見下ろすのは若く精悍な顔つきをした青年だった。その瞳は妖しく緋色に輝き、皮膚は陶器のように白い。そして——左腕が無い。

(あの腕の本体か——!?)

オールマイトは敵の足首を万力の如き力で掴み取る。そしてそのまま投げ飛ばさんと振りかぶる。

全体重を乗せた踵落としを防がれ、大きな隙を晒した青年には為す術はない——
—筈だった。

だが、投げ飛ばされるよりも速く、青年はオールマイトに掴まれた足を軸にして、独楽のように回転した。足首は絞った雑巾のように捻じれ、骨が碎ける耳障りな音が鳴る。泣き叫んでもおかしくない激痛が青年を襲っている筈。しかし、青年は顔色一つ変えることなく、渾身の回し蹴りをオールマイトの顔面に叩きつけた。

「ぬ、あっ!？」

呻き声と共にサッカーボールのように蹴飛ばされたオールマイトは、駐車していたパトカーに衝突する。それでも勢いは衰えず、もう10台程巻き込んでようやく静止した。

すぐさま反撃に移るべく、オールマイトは跳ね起きる。しかし——。

「くっ……」

ガクリと膝が落ちた。

(……強い！)

地面に転がったひび割れた携帯端末から塚内の声が聞こえる。

『オールマイト！ オールマイト！ 今情報が入った！ 近くのビジネス街で通り魔事件発生！ 被害者は50人弱！ 居合わせたヒーロー数名が抗戦するも出 blood 多量で重症！ 犯人と思われる男は左腕の無い若い男！ 男は警察署方面に逃走した！ 恐らく片割れだ！ 気をつけろ！』

塚内の推測を裏付けるように、オールマイトの視線の先では、『腕』のヴィランが触手を伸ばして青年を絡め取り、肘先に食らいつくように一体化した。

五体満足になった青年は、何かを確かめる用に自らの左腕を眺め——顔を顰めた。

そして、次の瞬間、異形の腕は枝のように細く長い人差し指を、躊躇なく自らのこめかみに突き刺した。

「あ、っ、ア、っ、あ、a、!?!」

言語にならない嗚咽を漏らしながら、青年は何かを探すように頭蓋の中を穿り返

す。

そして、不快な水音と混じり合った嗚咽は、やがて明瞭な音へと変わった。

「個性」

「ヒーロー」

「オールマイト」

「なるほど、くだらん世界だ」

「だが、狩場としては上等だ」

青年はこめかみから指を引き抜くと、脳漿に塗れた指先をオールマイトに向ける。

「貴様は食いでがありそうだ」

異形の青年から純度の高い食欲を向けられたオールマイトは、されど怯むことなく立ち上がる。

鼻に詰まった血液を地面に吐き飛ばし、拳を構える。

「腹を壊すなよ」

オールマイトの体からは、活動限界を告げる煙が、仄かに立ち上っていた。

《Profile》

name: スティーブン・A・スターフェイズ

birthday: 6/9

height: 182cm

like: ,

love: ,

ability: エスメラルダ式血凍道

○権謀術数に長けたライブラのNo.2だ！

○我慢の限界が近づくほどに優しくなるぞ！

○出久の血液の特異性に最初に気がついたぞ！

○当初は自分と同じ役割の人間をライブラ内にもう1人作ることを目的として

出久を育てていたぞ！

○出久に計算による人間関係の構築や、他者を利用する才能が絶望的に無かったことから早々に諦めたぞ！

○無自覚ながら『クラウスと同種』の人間である出久を絶対に裏切らない人間の一人として認識していたぞ！

○それを察した家政婦のヴェデットから促される形で、一時期から良く出久を夕食に誘うようになったぞ！

○しかし、出久が『クラウスと同種』の人間であるからこそ、最後まで自らの後ろ暗い部分については明かすことは出来なかったぞ！

超人秘密結社元構成員『緑谷出久(21)』 の活動記録

著者 MIL0201

発行日 2022年6月15日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/201724/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。